

図書館開設50周年記念誌に寄せて

日野市長
大坪 冬彦



このたび、日野市立図書館が開設50周年を迎えました。「暮らしの中に図書館を」をモットーに、50年間の歩みを進めてきた図書館ですが、この背景には関係者の皆様や市民の皆様の支えがあったことを忘れてはなりません。まさに市民と行政が一体となって築いてきたものだと確信しております。この場をお借りして御礼申し上げます。

日野市立図書館は、昭和40年(1965)9月21日に移動図書館「ひまわり号」の活動からスタートしました。今のように建物ではなく、車で市内を巡り、本の貸出サービスを行うことで市民の皆様に図書館とはどんなものかを肌で感じ取っていただくということから始まり、その後、分館と中央図書館を開設し、地域に根ざした公立図書館として先駆的な活動を全国的にも認めていただいているところです。

この半世紀の間、本の閲覧や貸出のサービス以外にも、レファレンスサービス、子どもへのサービス、障害者へのサービス等、様々なサービスを提供し、市民の皆様に本に親しんでいただき、さらに課題解決の支援、生涯学習のサポートに取り組んできました。

活字離れや電子書籍の普及などの新たな課題、コミュニティの場としての期待など、図書館をとりまく状況は、大きく変わっています。こうした社会環境の中でも、「人生を豊かに」、「暮らしを豊かに」、「地域社会を豊かに」するための生涯学習機関として、新たな時代のニーズに応えるべく、未来志向の図書館として、今後なお一層、サービスの改善・充実を図り、ご期待に応えてまいりたいと思っております。

なお、この記念誌は日野市立図書館の歩みを詳細に記録しております。市民の皆様をはじめ、図書館界の皆様にも貴重な資料としてご活用いただけるものと考えております。

結びに、今後も日野市立図書館運営にご支援、ご協力をいただけるようお願い申し上げます、私からのご挨拶といたします。



多様化するニーズに応じてきた50年の蓄積に期待する

日野市議会議員長
菅原 直志



日野市の図書館は、昭和40年（1965）9月21日に開設されました。開設前の図書館行政は「特定の市民向けサービス」という意識が強かったようです。その時代背景の中で、「暮らしの中に図書館を」というテーマを設けた先見性は、素晴らしいと思います。

「健康保険制度が肉体の健康における社会保障であるように、精神や教養の面での社会保障が図書館である」「図書館はその働きによって、今まで本に親しまなかった人を読書へ誘い、新しい未知の世界への扉を開ける」（昭和40年度・41年度日野市立図書館業務報告より）

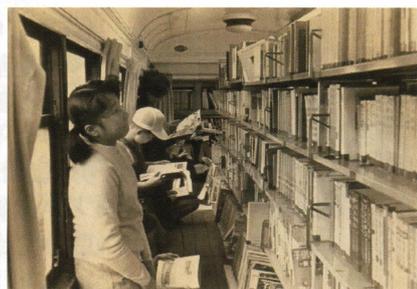
図書館草創期の綴りを紐解くと、新しい社会基盤作りに取り組む意欲に満ち溢れていることがわかります。1台の専用車からスタートした日野市の図書館行政。移動図書館ひまわり号は快走します。貸出数は、想定を超えました。その勢いは、その後の分館整備、中央図書館の開設を後押しすることになりました。書籍の貸出を基本としながらも、図書館サービスは、レファレンスサービス機能、障害者サービスの拡充、近隣自治体との連携にも広がってきました。

これらの施策を進める源泉は市民の声でした。「暮らしの中に図書館を」とした図書館行政50年の歴史は、利用者の声を聞き、想像し、新しい施策を提示し続けた歴史だったと思います。この節目の年に、改めてこれからの図書館のあり方が問われています。多様化する市民ニーズに応えるために、更に工夫と職員の意識改革が求められます。

人口構成の変化の中、高齢社会に対応した図書館のあり方が問われています。幼少期からの読書体験を豊かにするための施策展開も求められています。民間事業者と連携した新しい図書館のあり方も議論されてきました。この50年の間に、市内の在住外国人数は147名（0.2%）から2,743人（1.5%）となりました。外国人在住者の増加と共に、図書館ニーズも変わってくると思います。多様化するニーズに、柔軟に対応するのは、日野市立図書館の得意とするところです。期待します。



*1



*2

日野市立図書館の開設50周年を祝して

日野市教育委員長
西田 敦子



日野市の図書館を振り返る時、自分の教員時代の記憶と重なります。日野市の学校ではずっと以前から、子どもたちに良い本を読ませたい、本から得られる感動や憧れを子どもたちと共有したい、そんな願いをもって読書指導を熱心に行っていました。

移動図書館「ひまわり号」や子どもに夢の世界を提供した「電車図書館」、中央図書館や地域の図書館は教員の実践を支え、本に親しむ子どもを育てました。

昭和46年（1971）に元勤務校で行った読書調査から、75%もの子どもが「ひまわり号」や市の図書館の本を利用していることが分かります。学校に来る「ひまわり号」を子どもたちは喜んで迎えました。沢山の本を積んだバスの中で、友だちと本を選ぶ楽しさは格別だったようです。選ばれた本はバラエティーに富み、学級の読書熱を高めました。5年生の11月の読書量が一人平均8冊という記録が残っています。（昭和55年）

図書館と学校との連携は早くから行われ、手元に残っている図書館からのアンケートと学校の回答からも、子どものより良い読書環境を作ろうとする図書館と学校の熱意が伝わってきます。その熱意が市民に親しまれ、市民が誇る日野市の図書館を創る原動力になったといえましょう。

50周年を迎えた図書館が、“くらしの中に図書館を”の理念の下に、さらに市民に役立ち、市民とつくる図書館として発展されますことを期待いたします。

うみより ふかく かんがえる

日野市教育長
米田 裕治



「くらしの中に図書館を」この理念のもとに図書館活動を展開して半世紀がたちました。

この間、私たちのくらしは大きく変化しました。高度情報化、多様化、グローバル化、…。

しかし人々が願うことは昔も今も変わりません。

よりよく生き、よりよき社会をめざす。

今、「くらしの中に図書館を」がもつ意味を時代の文脈でとらえなおすことが必要だと思います。

くらしの中のひとこまひとこまに、メディアから流れるニュースのここそこに人々の問いは芽生えています。人々の進むべき道筋に思いを深めています。

「うみより ふかく かんがえる」

平成26年度NHK全国学校音楽コンクールの小学校の部課題曲「ゆうき」（作詞 中川季枝子 作曲 村松嵩継）の結びの歌詞です。図書館の果たすべき役割を考えるとときにとても大切な言葉だと思います。

図書館で自分の内なる声求めていた本と出会う。感動、共感。著者とのコミュニケーションが時間をかけてゆっくり深まり熟成していく。勇気がわきでてくる。問いが深まっていく。人と人をつないでいく。

半世紀を振り返り、図書館の歩むべき道を多くの人と考え合いたいと思います。

本と図書館が持つ知と時の集合体への力を信じて。

50年の実績を踏まえ、よりいっそうの充実を

日野市立図書館
協議会委員長

大杉 宏光



昭和40年(1965)、一台の移動図書館車から始まり、今や、日野市立図書館は、中央図書館を中心に日野市内のほぼ全域をカバーすることになりました。この50年の間、多くの方々、行政当局の方々、そして、市民の皆さん方の支援、お力添えがあり、50周年の今日を迎えることができました。

日野市立図書館は、全館あわせて蔵書数は約80万冊、貸出総数は160万冊となり、図書館は、ほぼ安定期に入り、着実な前進を続けているといえるのではないのでしょうか。この間には、さまざまな困難や挫折に見まわれたにも拘らず、多くの先人や職員の努力により、これらを克服し、現在に至っています。

ここ数年の図書館の各種指標をみると、右肩上りの状況とはいえず、横バイであるのが、すこし残念な気がします。これには人口の減少、他のメディアの普及など社会的状況の変化があると思います。いたずらに、量的拡大にはしり、成果主義に毒されることは必要なく、市民のさまざまな需要に着実に応えて行くことが大切だと考えます。

50周年の次のステップは、将来の図書館のお客さんである幼児、児童、生徒等の若い世代をターゲットにし、児童図書の実績、学校等の協力を得ながら、子どもたちへのサービスに重点をおき、50年の実績を踏まえ、これまで以上の充実に向け、努力することが大切と考えます。

私の誇り

「水道の蛇口をひねると水が出てくるように、本が出てくるのが図書館サービスだよ」と、よく父（注：有山崧第2代日野市長）が言っていました。図書館とは単なる建物ではなく、住民が求める資料（本）や情報を提供する場所だということです。言い換えれば文化の社会保障ですね。

住民の住んでいる場所に図書館が動いていくという発想で、移動図書館からスタートした日野市立図書館ですが、その特色は今も身近な分館システムに生きています。中央図書館と分館が一体となってシステムとして機能し、市内のどこに住んでいても利用しやすい環境が整っています。また図書館を利用する人なら誰でも知っていますが、読みたい本はリクエストすればすぐに取り寄せてくれます。

そんな日野市立図書館は、日本の公共図書館をリードし、先駆的な役割を果たしてきました。そして全国のお手本にもなり、各地で新しい「市民の図書館」が誕生しています。

私の父親は、図書館という文化を通じ、戦後の日本を建て直すため、全力を注いでくれました。その結果行き着いたのが、日野市立図書館でした。前川恒雄さんを初代の館長に迎え「本が蛇口から出てくる」図書館が誕生したのです。父は仕事に対する強い信念を持っていただけではなく、私生活でも実に明るくユーモアがあり、公平で裏表のない人でした。

日野市立図書館と我が父親は、いつまでも私の誇りです。

元日野市立図書館
協議会委員長

有山 至

